

★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版2－2）

川瀬健一

2) 伽藍の南北軸の傾きの意味するところ

「武蔵国分寺」の変遷が従来説ではどう語られていたか。この問題に入る前に、伽藍の南北軸が真北を向いているのか、それとも真北から西に7度傾いているのかという問題が、何を意味しているかを指摘しておこう。なぜなら後で見るように、従来説によってまとめられた発掘報告書や論文はみな、この伽藍の南北軸の問題をほとんど無視しているからである。

先に見たように「武蔵国分寺」とされた古代寺院の遺跡は、二つの異なる南北軸からなる二つの遺跡で成り立っている。

一つは南北軸がほぼ真北を向いているもの。

これはまず、伽藍の中で最も古式の瓦が唯一出土しているので、伽藍の中でただ一つ先に作られたと考えられている塔1である。そしてこの塔1の東に南北に走り、塔1の東南で直角に曲がりそのまま西に延びている伽藍地区画溝FGHである。さらにこれに加えれば、東山道武蔵道もまたほぼ南北軸が真北にむいており、この道の西側にある「武蔵国分尼寺」とされた古代自身の伽藍中軸線も真北を向いている。

これが第一のグループである。

第二のグループは南北軸が真北からほぼ西に7度傾いているもの。

これはまず「金堂院」を中心とする伽藍中枢である。そしてこの伽藍中枢の中門から南門を経てさらに南に延びる伽藍中軸線に沿って作られた参道。さらに伽藍地区画溝のABCD線とこれの西への延長された区画溝である。

ちなみに現在の武蔵国分寺付近の磁気偏角は2010年の段階では西に7度ほど傾いており、遺跡で確認された「金堂院」の伽藍中軸線の真北に対する傾きは、現在のこの付近の磁気偏角とほぼ同じだということです。

まず真北を指している伽藍が何を指しているのか。この問題を考えてみた。

真北を測定するには、天文学の高度な知識が必要である。そしてこれは天体運行の精密な長期にわたる観測をもとにして行われる暦策定のための重要な知識でもあります。

古代の東アジアにおいてこの知識と技術は中国王朝が独占しており、周辺の諸国は中国王朝に朝貢することによって、中国王朝が策定した暦を頂く形で導入していた。もちろんその間の通交を通じて中国の天文観測と暦策定に関する学術書を手に入れそれを学んでいたことはあるとしても、あくまで暦の策定権は王朝の独占でありました。

ということは中国の朝貢国である日本列島においては、その代表王朝が暦の策定権を独

占し、そのための知識と技術を独占していたものと考えられるわけです。

では古代末において列島の代表権を争った九州王朝と近畿天皇家の建設した寺院や都の遺跡から、それらの南北軸がどの程度ずれているかを判断して、これに依拠して、それぞれが列島における代表権を獲得した時期を確認してみましょう。

ここは肥沼さんがやってくれました。

寺院については近畿天皇家の中核の寺院です。調べたのはグーグルマップです。

- ・斑鳩寺(若草伽藍)・・・西偏20度？ 7世紀前半
- ・法隆寺東院(夢殿)・・・西偏20度？ 7世紀前半
- ・法隆寺西院・・・西偏3～4度 7世紀中ごろ

ただし法隆寺については川瀬が再調査したところ少し違っていた。

- ・斑鳩寺(若草伽藍)・・・西偏20度 (1939年度調査から)
西偏23～26度 (1968・69年度調査から)
- ・法隆寺東院(夢殿)・・・西偏7度
- ・法隆寺西院・・・西偏7度

であった。

- ・本薬師寺・・・ほぼ南北軸 7世紀後半
- ・薬師寺・・・ほぼ南北軸 8世紀初め
- ・東大寺・・・ほぼ南北軸 8世紀中ごろ
- ・唐招提寺・・・ほぼ南北軸 8世紀中ごろ
- ・飛鳥寺・・・ほぼ南北軸 7世紀後半
- ・川原寺・・・ほぼ南北軸 7世紀後半

都については、「平安京の方位はどうやって決められたか」

(http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/hosizora/astron/astron1/astron1_P11-15.pdf) という論文から確認され、

古い順からいうと

- ・難波京・・・ほぼ南北軸 (真北から僅かに東に偏る) 第一次なら7世紀中ごろ (九州王朝のもの)。第二次なら8世紀中ごろ (近畿天皇家)
- ・藤原京・・・ほぼ南北軸 (平城京と同じ) 7世紀後半 (近畿天皇家)
- ・平城京・・・ほぼ南北軸 (真北から西に21分偏る) 8世紀初 (近畿天皇家)
- ・長岡京・・・ほぼ南北軸 (真北から西に7分偏る) 8世紀後半 (近畿天皇家)
- ・平安京・・・ほぼ南北軸 (真北から西に23分偏る。つまり1度に満たない) 8世紀末 (近畿天皇家)

都はすべてほぼ南北軸になるのはこれが王朝の都だから当然と考えられますが、近畿天

皇家建立の寺院で7世紀後半を画期として西に傾いた寺院からほぼ真北を向いた寺院へと変わっていることはこの時期に列島の王権が、事実上九州王朝から近畿天皇家に代わっていることを示すものと思われます。

この観点を導入して「武蔵国分寺」遺跡の異なる南北軸を持つ伽藍の問題を考えてみると、伽藍中軸線が真北を向いている塔1とこれに関連した伽藍地区画溝の造営には、王朝が関与していることが想定でき、さらに伽藍中軸線が西に7度傾いている「金堂院」とこれに関連した伽藍地区画溝などの造営には王朝は関与せず、この場合は北を求めるのに磁石を用いたと考えられます。なぜなら磁石の指す北＝磁北は真北とはずれている場合が多いからです。

では「武蔵国分寺」遺跡の造営時期の磁北は真北に対してどの程度ずれていたのか。

この問題を考えるのに格好のサイトがありました。

日本考古地磁気データベース（岡山理科大学内）<http://mag.center.ous.ac.jp/>というサイトです。

このサイトが作られる際に発表された報告書「日本の考古地磁気データベースと過去2000年の地磁気永年変化」（第232回生存圏シンポジウム @極地研 2013/08/20 において報告されたもの：http://www.iugonet.org/meetings/2013-08-19_20/T_Hatakeyama.pdf）によると、これは考古学遺跡・遺物の中で、主に土器窯跡の床面、たたら製鉄炉跡、炭窯跡、カマド跡、火災跡からその方位を、そして土器片、窯跡の壁・天井から強度を測定して作成したもので、これらの遺跡は主に土器編年などから考古学的年代が明らかになっているものを多数選んだものだそうだ。ただしサンプルの関係で主として日本列島の中の西のほう、九州から中部日本までが中心であり、東日本は土器編年がはっきりしていないなどの理由でサンプル数が少ないのが欠点だそうだ。

そしてこの多数のサンプルから得たデータをもとに紀元400年ごろから以後の日本列島の磁気偏角永年変化の傾向を掴み取るとともに、ある地点のある年代の磁気偏角を判定できるようにデータベースに基づいて磁気偏角検索サイトを作ってみたとのことであった。

この検索システムを使って「武蔵国分寺」遺跡のさまざまな時代の磁気偏角を調べてみた。

検索システムに入れた経度と緯度は、現在の武蔵国分寺の経度と緯度であり、それはそれぞれ、東経 139.2859 度、北緯 35.4051 度である。そして検索システムにいった年代は、西暦 660 年、675 年、700 年、720 年、750 年。最初の 660 年は九州王朝が唐・新羅連合軍に敗れて、列島における代表権を事実上失った時期。675 年は壬申の乱の直後で列島における権力中枢が九州王朝⇒近畿天皇家天智朝⇒近畿天皇家天武朝に変化した直後の時期。700 年はこの翌年に近畿天皇家が大寶律令を策定し、列島における王朝として権威を確立した時期。720 年と 750 年は 741 年の聖武天皇によるいわゆる「国分寺建立詔」の前後である。そして最後に武蔵国分寺が落雷によって焼失し再建されたことが確実な年代、845 年で

ある。

その結果は以下の通り。マイナスは磁北が真北に対して西に傾くことを意味する。

660年の偏角は -11.1 度

675年の偏角は -10.3 度

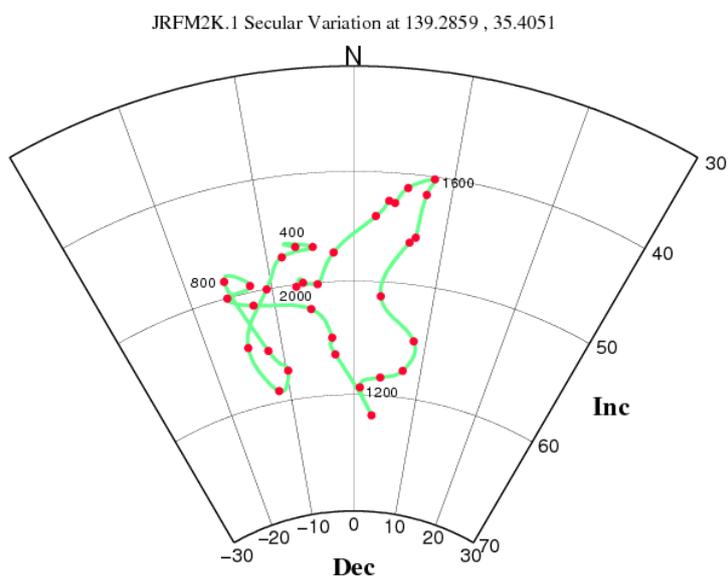
700年の偏角は -9.8 度

720年の偏角は -10.2 度

750年の偏角は -12.0 度

845年の偏角は -12.6 度

さらにこの現在の武蔵国分寺の場所での磁気偏角の永年変化は次の図のようになると計算された。



(武蔵国分寺磁気偏角永年変化の図)

この計算結果では、「武蔵国分寺」付近の磁気偏角は、西暦 400 年ごろから 1100 年ごろまでは西に傾いていたが、その後東に傾き、これは西暦 1800 年ごろまで続いた。そして 1900 年ごろからは再び西に傾き、現在はほご西に 7 度ほど傾いているとのことである。

以上のデータベースに基づく計算によれば、「武蔵国分寺」遺跡の「金堂院」を中心とする遺跡の造営時期は、7 世紀中ごろから 9 世紀中ごろのどの時期をとっても磁気偏角は西に傾いているので、「金堂院」の造営はこのどの時期であってもおかしくないことがわかります。つまり従来説のようにこの「金堂院」が聖武天皇の「国分寺建立」の詔に伴って作られたものと判断せず、もっと前の時期に作られたとすることも可能であることを示しています。

(2016年10月14日)